

て、うすきわたをあさぎにそめてうへにひきて、野べのかすみはつゝめどもといふ歌の心なり、  
はかまもうちばかまにてはなをつけたりけり、このこぼれてはほふは、七宮と申御母のよそひ  
とどき、侍し、御車ぞひのかりぎぬはかまなどいろゝのもんおしなせして、かゝやきあへる  
に、やりなはといふものも、あしつをなせにやよりあはせたる、色まじはれるみすのかけ緒など  
のやうに、かな物ふさなどゆらゝとかがりて、なに事もつねなくかゝやきあへり、攝政殿藤原忠通  
通は御車にて、隨身などきらめかし給へりしさま申もおろかなり、法勝寺にわたらせ給て、花御  
らんじめぐりて、白河殿にわたらせ給て、御あそびありて、かんだちめのぎに、御かはらけたびた  
びすゝめさせ給て、おのゝ歌たてまつられ侍りける、序は花ぞのゝおとゝ源有仁ぞかき給ける  
となんうけ給はり侍し、新院の御製など、集にいりて侍るとかや、女房のうたなど、さまゝに侍  
りけるとどき、侍し、

よろづよのためしとみゆる花の色をうつしとゞめよ白河の水などぞよまれ侍りけるとき  
き侍し、みてらの花雪のあしたなごのやうにさきつらなりたるうへに、わざとかねて、ほかのを  
もちらして庭にしかれたりけるにや、うしのつめもかくれ、車のあしもいるほごに花つもりた  
るに、こすゑの花も、雪のさかりにふるやうにぞ侍りけるとぞ、つたへうけ給はりしだにおもひ  
やられ侍りき、まいて見給へりけん人こそ、おもひやられ侍れ今又見古著聞集

〔百練抄六崇徳〕大治元年十二月十六日、兩院白河、女院璋、幸白河殿、覽雪、攝政藤原忠通、以下騎馬扈  
從、新院同御騎馬、人々装束、盡善盡美三代要略

〔續世繼二白河の花宴〕いづれのとしにか侍けん、雪の御幸、せさせ給しに、たびゝはれつゝけふけ  
ふどきこえけるほごに、にはかに侍りけるに、西山ふなをかのかた御らんじめぐりて、法皇白河  
も院羽鳥も、みやこのうちにはひとつ御車にたてまつりて、新院御なをしに、くれなるのうち御